
200文字で三題噺

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

200文字で三題噺

【Nコード】

N1449M

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

200文字小説で三題噺を綴っていききたいと思います。

【ジャスト200文字の連作】

煙突・唐辛子・男

随分と煤けた煙突の下、玄さんは今日も町の銭湯に一番乗り。
銭湯の主人が丹念に育てた鉢植えの唐辛子が赤く色づいている。

「ごめんなさいよ」

なんと暖簾の向こうの番台に見知らぬ美女が腰かけているではないか。

ひゃっほう、ばあさんが死んで10年。

ようやくわしにも恋の花が咲きそうじゃわい。

「ありがとうございました」

「おや、お姉さん随分と声が低いのですね」

「ええ、私男ですから」

玄さんは何だか泣きたい気持ちになった。

新聞・タコ・王子

私の朝は新聞を読むことから始まる。

デキル女になりたい。

そう思ったのは松田先輩の仕事ぶりを見たからだった。

密かに憧れている先輩は、私の心の王子様。

努力の末、今夜はとうとう先輩とコンパに漕ぎ着けた。

すでに先輩は酔いつぶれて寝てしまっている模様。

「あっ松田寝ちゃってるゝ落書きしちやえ」

このタコ！ 何しやがる。

先輩の額には油性ペンで肉の文字が刻まれていた。

「キン肉星の王子かあ」

恋の切なさを知った瞬間だった。

薪・太陽・結婚式

キャンプファイヤーで使う薪を手に、私は真夏の太陽を見上げた。
隣であなたは淡々と作業を続けている。

親友の彼氏、だなんて微妙な関係だね。

「俺と結婚してくれ」

真剣な眼差しに、心臓が跳ねる。

「ばーか、お前じゃないって。ちよつと練習させてくれ」

彼は私の髪をくしゃつと撫でた。

「お前も早くいい人みつけれよ」

彼は背を向け、ひらひらと手を振った。

二人の結婚式では、友人代表としてぜひ、中島みゆきを熱唱したい
と思う。

畑・種・神（前書き）

今回、ドラゴンボールネタなので、
わからなかったらごめんなさい。

畑・種・神

あたり一面に広がる畑には黄金の穂先が揺れている。

種をまくときは辛かったけど、こうして実りのときを迎えられるのはとても嬉しいと少年は思った。

「収穫物の初穂を神に捧げてきなさい」

村の長に命じられ少年は兄とともに神の住む祠へとやってきた。

「あの神様顔色悪くないか？　それに頭に触覚みたいのが生えてるし」

神は少年たちを見つめてにやりと笑う。

「ポコペンポコペン、だーれがつついた……」

「やべえ、魔族のほうだった」

畑・種・神2

昔むかし弟のスサノオの悪戯にブチ切れた太陽の神アマテラスは、
天の岩戸に引き籠ってしまい、以来この世は闇に支配され種も蒔け
なければ畑も耕せず、皆はほとほと困り果てていた。

「やはりここはアメノウズメの裸踊り……」

「いや嵐だ。誰か嵐の写真集を買ってこい！」

10分後

「やゝん、二宮君超かっこいい」

「やっぱり松潤だよお」

ご・ご・ご・ご・ご・ご

天の岩戸が低い音を立てて開く。

「ええ？ あんたそれで出てきちゃうんすか？」

鏡・鷹・男

女は鏡に顔を映し念いりに化粧をしていた。

漆黒の髪をアップに結い上げ紅をひく。

濡れた唇に、つっと畳紙を咥える。

和服の襟元を空かした風情がなんとも艶めかしい。

純和風の部屋の箆笥の上に置かれた、鷹の剥製が揺れる。

そこに男がひとり入り込みそっと女の背後から忍び寄った。

鏡に映る見知らぬ男。

女の悲鳴が喉で凍りつく。

「うんうん、わかるよ奥さん。117番したくなる気持ち」

「いえ、だからそこで時報をきかれても……」

垣根・ひよこ・肝

人の垣根をかきわけて、ひよこのような金髪頭の青年が電車に乗り込んだ。

やばそうな目つき。

車中には、誰もこの青年に何かを意見できる肝の据わった兵はいないだろう。

そこに老婆がひとり乗車し、彼の前に立った。

するとあろうことか、青年は立ちあがり席を老婆に譲ろうとしたのである。

「いいえ、結構です。私そんな年でもありませんので」

「老人だからだからじゃねえ。その……レディーファーストだ」
車内に歓声が沸き起こった。

傘・浮き草・黄泉の国

湖畔のむこうで傘が揺れている。

女が俺に向かって手招きした。

マジ？ 逆ナンパってやつ？

俺はお姉さんに向かって猛ダッシュした。

やがてお姉さんはずぶずぶと水に沈み

黒髪が浮き草のように水面を漂った。

「もう逃がさない」

気がつくと俺は酒場にいた。

「お前は孫の明弘じゃないか」

隣で死んだはずのじいちゃんが水割りを飲んでいる。

「この店の名は——黄泉の国——決してここから生きては戻れないんだよ」

女の青ざめた唇が嗤った。

合図・蚊・水夫

オッス！おら蚊。みんな元気にしてっか？

おら強え奴と闘うとわくわくすんだ。

おらの相手は水夫。

こいつめちやくちや強えんだ。

悔しいけど今のおらじゃ歯が立たねえ。

「きさまでもこのオレでも、まともに太刀打ちできる相手ではない
：だがオレと貴様が組めば倒せる可能性がすこしはある！合図を送
る。オレが水夫の注意をひきつけている間お前はあいつの血を吸え、
いいな」

1、2の3今だ！

「うわっこいつワキ臭せえ」

ぶっん。

ぺちっ

サイコロ・雪・鳥飼

半丁賭博が行われている。

振られたサイコロの目に誰もが息を呑んだ。

男が幸福そうな顔で外に出てきた。

「今だ！ 雪ちゃん」

梟はその名のとおり雪のように白い翼をはためかせ、男に襲いかかる。

男は有り金を雪に奪われた。

「もういいぞー！ 雪、帰ってこーい！」

鳥飼の声が闇にむなしく木霊した。

しかし消えた雪が、鳥飼のもとに戻ってくることは二度となかった。

後日、『ラスベガスで梟が豪遊』という珍見出しが紙面を飾ったという。

宮殿・バラの花・黒い

宮殿に咲く一輪のバラの花。

それほどまでに美しい姫だった。

「お人形遊びですか？」

部屋に散らばった人形。

しかしその様子は少し異なっていた。

「そうよ。マリアはとってもおしゃべりなの。だからお口を縫ってしまったの」

口を縫われ、硝子玉の瞳が無表情にメイドを見つめている。

揺り椅子に黒い大きな塊がのっていた。

「それはメアリーよ。

言うことをきかないから火あぶりの刑にしたの。

今度はお前の番ね」

メイドの悲鳴が凍った。

紐・猫・醜い

時は平安。

意中の姫を一目みようとして、一人の公達が築地の破れから噂の姫の様子を伺う。

「聞くところによると、姫は大層な恥ずかしがり屋とか。そこがまた奥ゆかしい」

猫が一匹御簾の中から飛び出してきた。

綾の紐を引きずっている。おそらく柱に括られていたのだろう。その拍子に御簾がめくれて、中にいる姫の顔が垣間見えた。

「殿、お気を確かに」

惟光が主を支える。

「もはや美しい醜いの問題ではない。

姫は……うゝわ、きつつう」

市場・うぐいす・金色の

市場は賑やかだった。

「もったきれいな声で鳴かないか！」

露天商のおっさんが乱暴にうぐいすの入った籠を叩いた。

「僕がそのうぐいすを買うよ」

夕飯のおかずを買うお金で僕はうぐいすを買ってしまった。

「もう捕まるな」

僕はうぐいすを逃がしてやった。

すると雲にのった老人が降りてきた。

「私は神です。私の僕であるうぐいすを助けてくれたお礼に
この金色の板東英二をあげましょう」

板東英二は一心にゆで卵をむさぼり食っていた。

墓・バラの花・赤

墓の前に男がバラの花束を手向けた。

「君の好きだった花」

風が吹き辺りに転々と血の滴を孕んだような赤が散った。
彼女の死が脳裏を掠める。

癒されることのない罪悪感。

「君を殺したのはこの僕だ」

ガコッ

隣の墓石からによつきと手足が出た。

「やっぱり君が犯人だったのか」

「ええ？ 刑事さんそんな格好してなんでこんなところにいるんですか？」

「君があやしいと思ってずっと張り込んでたんだよ」

——コスプレ刑事、斎藤茂吉 見参——

お茶・蛇・山姥

一軒の茶店があった。

旅の男が出されたお茶を飲んでみると、遊び女の客引きにあった。

男は応じた。

「これはな蛇を焼酎に漬け込んだ特性のラブジュースや。元気になるでえ」

仲居さんにすすめられるままに、男はそれを飲みほした。

障子の薄明かりに露わになる女の軟肌。

もう限界だ！

男は野獣になって女にマウントした。

明らかになる女の素顔。

「や……山姥ってどうか、買い取りまっくすのおばちゃん！」

忘れられない夜になりそうだ。

戸・岩・下女

孫がおじいちゃんにお話しをねだった。

昔むかし、お岩という名の下女がおった。

お岩が屋敷に奉公にあがって以来、不気味なことがおこりはじめた。

夜になると、か細い女の声で何かを数える声が聞こえるのじゃ。

不審に思った屋敷の主が、そつと戸をあけるとなんとお岩は自分のへそくりを数えておった。しかもこのお岩はたいそう上品な下女だった。

「おいちまい：おにまい：おさんまい：」

おじいちゃんはやりと笑った。

「おしまい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449m/>

200文字で三題噺

2011年5月14日12時20分発行